

沖縄県における外来種ニホンイタチの生息状況と対策

Distribution and control method of the feral Japanese weasel in Okinawa Prefecture

河内 紀浩, 渡邊 環樹 (八千代エンジニアリング株式会社),

嶋津 信彦 (株式会社島嶼生物研究所)

Norihiro Kawauchi, Tamaki Watanabe, Nobuhiko Shimadzu

ニホンイタチ *Mustela itatsi* は本州、四国、九州に生息する在来種であるが、ネズミ駆除を目的として、1920年代以降に日本各地に導入された歴史がある。沖縄県では沖縄諸島、慶良間諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島の22島に導入された記録がある。導入された島においては、在来の爬虫類や両生類の減少が指摘されており、その影響が懸念されている。しかし、ニホンイタチ導入後にその生息状況や在来生物への影響について調査された島はほとんどないのが現状である。

そこで、沖縄県の有人島において、ルートセンサスおよび自動撮影カメラによるニホンイタチの生息状況調査を行った。その結果、慶良間諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島の11島で確認された。また、新聞報道であったように宮古諸島ではミヤコカナヘビなどの絶滅危惧種を多数捕食しており、その影響が大きい。現在、沖縄県では外来種対策を進めており、今後の対策についても報告する。